

【書評】

松野尾裕著『賀川豊彦——互助友愛の教育と実業』

龍溪書舎、2020 年、347 頁

ISBN:978-4-8447-0682-3、定価 4,000 円＋税

岩田三枝子

本書は、経済思想と賀川豊彦研究の専門家である著者の松野尾裕（愛媛大学教育学部教授）が、経済学の視点から賀川豊彦の思想と活動を論じた研究である。

明治、大正、昭和期を通じての社会活動家であり、キリスト者であった賀川豊彦（以下、賀川）（1888－1960）については、賀川の1960年の没後から今日までの約60年の間、賀川の実想や活動の評価が国内外において試みられてきた。賀川の主な執筆が所収された『賀川豊彦全集』全24巻（キリスト新聞社、1962－64年）など、賀川の膨大な執筆は、その独特の表現や用語使用などから、決して理解のたやすいものではない。またその活動が、協同組合、農業、教育、神学等多方面に及ぶことも、賀川の実想・活動の全体像の把握が一辺倒ではいかない理由である。

そのような研究状況の中で、本研究書は2つの点で特徴を持つ。一点目は、経済学を専門とする著者による、経済学の側面からの賀川の評価である。二点目は、賀川の実想が実践された地を著者が実際に訪れ、当時を知る人々に取材を行うことによって、賀川の実想を検証している点である。

本書前半の第1章から第3章までは、賀川の「生活協同の構想」について論じている。

本書の根幹でもある第1章では、賀川の実経済学とは何かを、賀川の実代表的な執筆の一つ『主観経済の原理』（1920年）から論じている。著者は、賀川豊彦は「経済学者ではない」と明言し、賀川が説いたのは経済学ではな

く「経済哲学」であり、「相愛互助」こそ賀川の経済哲学の鍵概念であるとする。著者は、1910年代から20年代のアメリカでの労働者たちによる示威行動や、日本の大正デモクラシー、またロシア革命の時代的背景を確認しつつ、賀川の著書『主観経済の原理』を紐解く。著者は賀川の独特な用語の意図するところを丁寧に解説する。例えば、本書題名ともなっている「主観主義経済」とは、「人間価値と宗教価値と芸術価値と経済価値との総和をもって『生きた経済学』をつくる」ことであり、それは、「賀川の構想した協同組合である」と説明する（21頁）。さらに、人間の価値は貨幣以上のものであること（28頁）、経済活動においては、生産者と消費者の両方の人間性が尊ばれる必要があることなど、賀川の経済哲学の特徴を順序立てて説き、このような賀川の経済哲学が、「経済価値と宗教価値とは決して背馳しない」という賀川の宗教理解に基づいていることを指摘する（24頁、30頁、32頁、35頁）。

また、賀川の経済哲学の目的は、貨幣を得ることにあるのではなく、人間性の回復であり、そこには愛の犠牲と、生産者と消費者また都市と農村との間の連帯が必須であるとする。このような賀川の主張は、1920年刊行の著書『主観経済の原理』で明らかにされ、第二次世界大戦を挟んだ1947年刊行の『新協同組合要論』においても貫かれているとする（46頁）。

第2章では、賀川の三部作と呼ばれる自伝的小説『死線を越えて』（1920年）、『太陽を射るもの』（1921年）、『壁の声きく時』（1924年）を題材に、スラムに住む人々に対する賀川の視座を読み解き、賀川のキリスト教信仰に焦点を当てる。ここでは、イエスの活動や弟子たちとの関係は、「血族的社会」（102頁）ではなく、「相互扶助に基づく社会」である「社会連帯」を見ることができる、とする。また、賀川は、神の国を「人と人との間に現れる」ものと理解し、賀川において、「信仰と社会改革を統一的に把握」する必要性を指摘する（111頁）。

続く第4章から第6章では、賀川の互助友愛の教育と実業の、農業者たちの協働による日本各地での実例が取り上げられる。第4章では、静岡県にあった御殿場農民福音学校高根学園と食肉加工品製造の実践が描かれ

る。第5章では、デンマークでの義務教育を終えた人々のための民間教育機関をモデルとした酪農の開拓の様子や、北海道酪聯への道筋を整えた宇都宮仙太郎（1866－1940）と出納陽一（1890－1976）の活動を明らかにしている。さらに第6章では、北海道で酪農組合を立ち上げた黒澤西藏（1885－1982）を中心に、そのキリスト教信仰と協同組合運動においての賀川との思想的繋がりが示される。

第7章から第9章では、賀川が農民福音学校において提唱した「三愛（愛土、愛隣、愛神）」に共鳴し、その実践に取り組んだ岩手県東磐地域の菅原忠夫（1909－2009）による三愛塾運動の様子が論じられる。青年時代に東京で賀川たちのキリスト教に基づく社会改革運動に出会いキリスト者となった菅原は、賀川の唱える「三愛」を継承して故郷で「三愛塾」を設立する。三愛塾では、農業、林業、協同組合の研修を行い、また早天祈祷会や礼拝、聖書研究会も行われた。この三愛塾の人々の熱烈な要請により、1934年に賀川がこの地を訪れ、講演を行い、青年たちと語り、励ましを与えている様子を、資料を通して描き出す。

第7章では、賀川が農民福音学校において提唱した「三愛（愛土、愛隣、愛神）」に共鳴し、その実践に取り組んだ岩手県東磐地域の菅原忠夫（1909－2009）による三愛塾運動の様子が論じられる。青年時代に東京で賀川たちのキリスト教に基づく社会改革運動に出会いキリスト者となった菅原は、賀川の唱える「三愛」を継承して故郷で「三愛塾」を設立する。三愛塾では、農業、林業、協同組合の研修を行い、また早天祈祷会や礼拝、聖書研究会も行われた。この三愛塾の人々の熱烈な要請により、1934年に賀川がこの地を訪れ、講演を行い、青年たちと語り、励ましを与えている様子を、資料を通して描き出す。

第8章では、菅原の三愛塾運動の精神を受け継いだ三浦所太郎（1913－87）の東北農業協会と東北ミッションの働きに焦点が当てられる。菅原と同じ摺沢村出身の三浦もまた農民福音学校等の人々との出会いを通してキリスト者となる。京都大学農学部やノルウェーにおいても農業や農村生活を学んだ三浦は「日本山岳傾斜草地農業の学園を創設する」という目標のもと、山を入手し、仲間たちの集会所や宿泊場所も備えた建物を建設し、東北農業協会とする。また晩年には東北ミッションを立ち上げ、賀川の農民福音学校の再建を目指した。

第9章は、秋田県仙北市の安藤仁一郎（1896－1947）を中心としたクリスチャン集落の調査報告であり、最終章の第10章は、賀川と宮澤賢治の

組合活動への取り組みなどの点から、農村理解の両者の共通項を探る試みである。

以上のように、筆者は本書の第1章から最終章までにおいて、「連帯」を賀川 concepts の軸とし、その連帯の実践が日本各地において行われたことを明らかにしている。賀川 の思想と活動に共鳴した人々の連帯の実践の様子を鮮明に伝えることで、賀川 の理念がどのように人々と共鳴し、広がったかを示す。それは信仰の広がりであり、人々の連帯の広がりとも言える。本書には多くの人物が目まぐるしく登場し、初めてその名前を知る読者にとっては、本書に記される人々の関係性を把握することに時に四苦八苦するかもしれない。また、章によっては（例えば第5章「グルントヴィーと北海道酪聯の開拓者たち—宇都宮仙太郎と出納陽—を中心として」）、その人々や活動と賀川 との直接的な関連が一見捉えづらい章もある。読者は、第1章で論じられていた賀川 の人間性の回復と連帯に基礎づけられた経済哲学との直接的な関連を各章に期待しつつ章を読み進めていくかもしれないが、章を読み終えるまで、例えば宇都宮仙太郎や出納陽一が、賀川 とどのように関連があるのかを見出すことは難しいかもしれない。しかしその次の章まで読むことで、初期の組合活動に関わった人々の奮闘ぶりや、また多くの場合はキリスト教信仰とのつながり、さらに広がる連帯のネットワーク等の中に、賀川 との関係性の全体像が明らかになってくる。

そしてそのような、賀川 が目指した組合活動の広がり、その志と同じくする同志たちの活動の記録こそが、本書の意義なのだろう。読者は、本書を読みすすめる中で、一見無関係に見えた人々が実は、農業や組合活動における人間性の回復と連帯という思想と活動に共鳴する人々の大きなネットワークの文脈の中に生きているという事実が気が付かされる。これらの活動は賀川 が一人で行ったことではなく、志を同じくする実践者たちが、まるで聖書における使徒行伝の使徒たちがそうであったように、各地へ遣わされ、共鳴しあい、協働し、その地で活動の根を下ろし、継承していった。その様子を、1920年代から30年代を中心とした各地の農業に関わるキリスト者たちの奮闘ぶりと連帯を通して、本書は生き生きと描き出

している。

賀川が理論を実践に移した如く、筆者は、賀川の著書の世界から、実践が行われた地へとフィールド調査に赴いている。本書は、著者の現地からの調査報告と、その報告を肉付けする豊富な関連資料によって、賀川の実践の広がりをもっとインパクトを持って読者に伝えることに成功している。そのことにより、人々の言葉や当時の状況が細やかに再現され、読者は、賀川の思想や活動に共鳴した人々、また同じ思想系譜にある人々の当時の活動を、まるで当時の彼らと語り合っているかのような臨場感を持って受け止めることができる。

本書によって読者は、賀川の経済哲学論の現代性にも驚かされるであろう。「生産者は（中略）正規労働に従事する健康な成人男性だけでなく、女性も子どもも高齢者も障害者も、また外国籍の人も」おり、それらすべての人々が「一個の市民としての保護」をうけるべきだとする賀川の主張を指摘し（29頁）、さらに、そのような相互扶助の経済活動には、「親がその子に対する如き犠牲的精神」が必要であるとする賀川の手紙を引用することで、相互扶助の経済は、現代世界のコミュニティに生きるすべての人々を内包するのであり、また生産者と消費者との連帯が求められている（29頁）ことに読者の注意を促す。経済学者としての著者自身の、賀川の経済哲学と出会った時の衝撃があったのだろうか、と密かに想像する。

賀川の経済哲学の要諦である「経済価値と宗教価値とは決して背馳しない」に著者は読者の注目を促す。賀川のキリスト教的価値観に基礎づけられた思想が、人々の連帯と協働の実践として各地で実現した様子を本書を通して知ると同時に、本書を読み終えた読者は、この賀川の主張をいかに現代に活かすのか、の問いを委ねられることになるだろう。